

第 8 回 F C C サロン報告

6 - 1 . 第 8 回 FCC サロンの内容



土木学会認定
C P D プログラム

(社)土木学会 関西支部 FCC2004 FCCサロン 第 8 回 土木からの情報発信のあり方 ～文句のある奴かかってきなさい～

日 時：平成 16 年 8 月 6 日 (金) 18:30 ~ 20:30

会 場：大阪府立女性総合センター (ドーンセンター)

参加者数：29 名

話題提供者：兵庫県県土整備部県土企画局 技術企画課課長 本井敏雄

(株)アニマトール弘報企画 代表取締役 道下弘子

(株)テクタ 代表取締役 瓦井秀和

松原市立河合小学校 教諭 中庭哲史

コーディネータ：京都大学大学院農学研究科森林専攻 助教授 (FCC 代表幹事) 里深好文

産官学を含めた土木界の今までの情報発信のあり方、市民とのコミュニケーションの方法の問題点等について、土木界外部の方から忌憚のない意見をいただき、これからの情報発信、コミュニケーションを進めるにあたってのヒントを得ようとするものである。

1 . どんなことやってんの? 情報発信

従来から行われてきた土木界から社会への情報発信の実例を紹介。

本井：

兵庫県では、「平成 16 年度社会基盤整備の取り組み」というパンフレットを作成して、県内の公共事業の新規箇所や完成箇所を紹介している。このような取り組みは今年度から始めたこと。

森田：

大滝ダムで 13 年半勤務。バブル期からダム無用論が叫ばれる現在まで一つのダム現場に従事。その中で数年前まで、ダムの公共の意味を積極的に PR することはなかった。案内に使用するのは国土交通省の事業概要程度。



2 . 何が足りない? 情報発信

従来型情報発信の問題点、何のための情報発信か、何を発信すべきか等について議論。

瓦井：

土木からの情報発信は足りない。ほとんどが「いいわけ」。コミュニケーションをやっているつもりではあるが、実際はパンフレットを作ったことで満足しているような状態。

本当に必要な「なぜつくのか」という土木政策の説明」や「土木の技術のアピール」はできて

いない。受け身である。すばらしいことをやっているんだ、と出していくべき。誰に、どれだけ、どんなイメージを持ってもらうか、コミュニケーションのビジョンづくりを。

道下：

「誰に伝えるのか」がはっきりしていない。「わかりやすい表現」になっていない。根底に流れている、社会を支えているという気概・誇りを示すべき。

中庭：

嘘をつくことをやめよう。建前からの脱却を。情報の受け手への配慮に欠けている。土木は、文明を支えるという理念のもと、公権力と一体になっているから、パブリックの責任、説明責任がある。「お上」というのでなく、「パブリック」の責任が説明できるか。



3.ちゃんとやってるやん。なんか文句ある？

具体的な情報発信のあり方、土木と社会の文明論的關係等について議論を展開。

森田：

大滝ダムでは、平成8年に、国土交通省の発案で、建設現場を教育の場に提供する『学べる建設ステーション』がオープンした。発注者の要請で、我々も設計・施工で参加。このあたりから、施工業者の我々も公共を強く意識するようになった。見学施設は年間2～3万人が訪れている。

土木学会誌学生編集委員の磯部氏：

土木系の学生には現場の情報はあまり届かない。いい仕事をされているが世間に伝わっていない。現場を見せることによって周辺住民からの苦情が減った、ということは聞いたことがあるが、土木を避ける人もいる。もっとアピールすべき。

京都大学三村先生：

大学では、土木の使命とかいうことを、目的意識をもって教えている時間はない。最先端の研究を進めるので手一杯。そのため学生に十分な情報が届かないのかも。

瓦井：

個別の事業に対する説明とかが問題なのではない。土木全体を広報するものが必要。一般向け、子供向けの書籍も少ない。神戸市の土木博物館は一般への窓口としては素晴らしい。土木博物館、あるいは土木科学館がいるのでは？ WEBでバーチャル博物館、というのもあるだろう。

本井：

何をしたいか、何で表現するか。内容、メディア、表現力。コンテンツはあっても表現力が無い。

里深：

土木屋は、今まで表現力を鍛えてこなかった。表現しなければならなくなったのは、最近。

瓦井：

土木業界のことだけではないが、井の中の蛙でやってきた。もっと連携してマスコミも巻き込んで議論を。フォーラムも、来ているのは関係者・内輪ばかりで、「やった」という言い訳。

中庭：

土木には、パブリックとしての発信について説明責任がある。これまで、アリバイづくり、結論ありきの説明をしてこなかったか。発注者より、市民の方を向いて発信すべし。ビデオをつくるにしても、市民のためのものなら、それなりの内容が必要。大和川工事事務所のホームページはよい。

「13歳のハローワーク」に、土木関連の仕事が記載されていない、ということを考えねばならない。土木は、文明を支える仕事だ。

森田：

ここに、黒四の大町トンネルが貫通したときの写真がある。このときは、国の施策と建設事業が同じ方向で、ベクトルが合っていた。もう一つ、明石海峡のピアができるときの写真。この後ろにどれだけの技術者がいるか…。今、ベクトルがずれているか…。土木技術者の浮かぶ瀬がない。ちゃんと説明しないと。雑音が多すぎて純粹なところを忘れている。

道下：

情報を伝える方法はすでにある。しかし、「魂をこめて」伝える熱意がないとダメ。国交省の予算はすごいが、言葉が「感動のため」ということで使われていない。やさしく、わかりやすく、的確に。心をこめたら絶対通じる。

本井：

魂は、嘘をつかなければ通じる。文明論と魂をどうつなげるか。個々の場で伝えていくしかないのでは。土木でつくるものが社会の役に立つという思いを。

4. これからの情報発信

コミュニティが崩壊しつつある時代に「公共事業」が軽んじられる中で、土木の歴史教育の必要性、公共性の概念、「みんなのもの」をつくり「愛着」をもって維持していくという認識、「技術の優秀性と政策の未熟」について議論。

中庭：

パブリックについて、フランスは学校では勉強だけを教え、教会中心のコミュニティが成立している。日本では、高度成長期の民族大移動でコミュニティが壊された。私達自身のパブリックのために、共に社会を支えるという考え方…公共、社会を再生する必要がある。

里深：

若年が気概をもてない。公共心のないところに公共事業はない。

瓦井：

今は成熟した社会になっており、生まれた時、色々なものが既にできている。土木によって、かつてのリスクが今では安全になっている。これだけ雨が降って、どれだけ死んだ、というような歴史を教えるべき。黒部ダムも、電力にこれだけの犠牲を払って、というストーリーがあった。今はストーリーがつかれない。ゼロベースから、時間軸で。

中庭：

公共性の概念、国家と個人の機能はどうなのか。自立した個人のアソシエーションが崩壊し、公共事業が国家に吸収されている。

本井：

公共はコミュニティでしか教えられない。阪神淡路大震災10周年になるが、コミュニティの重要性を忘れている。コミュニティとコミュニケーション。豊岡の港大橋歩道橋の事例では、地域の人が自分たちで計画して、立派にできた。コミュニケーションをやって、行き着く先は…。みんなのものだ、という認識と愛着ができたろうまくいくのでは。

森田：

土木学会誌8月号の時局論説「公共事業の欠陥とその生成の根拠は何か」に「技術の優秀性と政策の未熟」という指摘がある。もっと技術者を泳がせるべき。パンフレットに技術論がない。技術がなければ絵に描いた餅。国土交通省も変わってきた。福井の水害のあと、どうするか、期待がある。

瓦井：

ハザードマップを見ると、どれだけ危険にさらされているか…。もっとオープンにしたら、役割も明確に出てくるのでは。

中庭：

「技術の優秀性と政策の未熟」というのは素晴らしい言葉だ。行政に対しても、政策に対して提言を。都合の悪い情報を伏せていても、いずれわかる。知られたくないことも知らせるべき。パブリックを一步前へ。